こゝろのひかり

恩寵の巻

目次

前編

啓示の恩寵……一
三聚淨戒……一一
執持名號……一二
信機信法……一二
念佛……一四

後編

御消息……二四—二七

啓示の恩寵

如來の智慧光との關係に人の佛知見開示し如來の眞理を信認し悟達するを要す。即ち如來の過境的實在を證明し與へられたる知見によりて佛道增進の光明となる。即ち是れ如來の啓示なり。信は澄淨忍許の二義とは知的信仰に名付く。澄淨とは、如來の恩寵の關係機能致一に自己の心念疑雲已に霽れ信水已に澄み、如來の眞月を澄淨なる心水に靈感し信心淸淨なるが故にこゝに於て實在を證明し其本質意義に悟達し其過境的眞理なることを自己機能に實現し冷暖自知なるを忍許の義とす。

また智力的信仰は科學的の認識に求むるに宗教的關係の三味定中によりて其實在を信認するにあり。三味とは宗教的關係の機能致一の狀態なり。三昧は主體よりは觀照または靈感にして客體よりは啓示なり。智力的信仰は宗教的關係の觀照即ち客體の本質形式を知見す。即ち神の觀念或は相好光明または內包の德たる慈悲、智慧、神聖を反映し客體化す。啓示はこの機能致一の觀照なり。

經に佛法の大海には信を以て能入とす。信は道源功德の母と。實に自から理性の承認すにあらざるよりは心情に於ても歸命憑依して安立すること能はざるなり。全く心情の安全を得るは、如來の實在を信認して其權能に一任するときは必ず解脫を得るものと自から承認すればなり。若しこれを疑ひ確信あらざるかぎりは宗教生活は望むべからず。

啓示は宗教的意識を向上せしむる光明にして一たび啓示を獲てもそれに止るべきにあらず。啓示は常に不斷に宗教意識を高きに導く處の光として、人は與へらるゝ知見によりて向上し、人の信念の進むに隨つて啓示は高等に顯現す。

宗教的意識が不識的の蓋然たるより正しく意識的に啓示せられ、其本質を證明し悟入するに至るは、信仰に三種の信認あり。

一、仰信　二、解信　三、證信

仰信とは不識的に客體に對し歸依渴仰し對象を科學的に求むることを要せず、一心一向に過境的實在を信じ理性の批判を顧みず。

是宗教的意識の根本は心理的に觀ずれば、宗教的衝動をして其性能は原始動物より人類に至りて、神的需要の反映として其宗教的性能は歷史的に向上し、遺傳の恩寵として不識のうちに神的憧憬の念萌發し高きあなた雲井遙に歸依渴仰の信念にと現はれ、いかにもして宗教的關係の眞實を得んと欲求し、法華に所謂る、一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まずとまでに其人の戀慕を發するは是れ宗教的性能にあり、其本因は形而上より論ずれば法身如來藏性より賦與せられたるものゝ物と共に進化の人類として顯現したるものなり。

宗教的性能が代々の遺傳として向上し來りし此の素質こそやがて如來の啓示の恩寵を預るべき豫備にして、いまだ意識的に實在を證明するに至らざるも、宗教的關係の業因たる仰信なり。此仰信こそやがて其の佛子たる啓示をうべきの卵、佛知見の摩

尼寶珠と成るべき璞質なり。

解信とは不識的の盲從的仰信より意識的に如來の本質意義を悟達せんと欲するに科學との對照により、また自己の理性をして滿足得せしむべき處の眞理を理論の學說の方面に於て認識す。理論にては如來の啓示がいかに人の知見としうべきや如來の本質性能は之を名字の上に示さばいかなる表號を以て其內容を表明せるや。

また止觀の相貌啓示を表明することを錄する經典に如來の相好圓滿なる表象を以て應身を啓示す等の如き敎經文字に研究精密にして啓示の表明及び證得の功果はいかなる精神狀態なるかの如きを明了に解して理論としてはもはや疑團を止むべき餘地なきに至れば即ち解信なり。然かるに解信は更に進んで眞實なる宗敎的關係たる三昧の中に於て啓示を與ふべき豫備として圓式として眞實價値あり。解信は宗敎の實地の意識にあらざるを以てこれに已に得たりとせば增上慢に墮し理論の病的に墮り文字の葛藤に縛されて徒らに他の寶貨を數へて自から半錢の價を得ざるに至らん。現代の宗敎を求むるその理解を以て眞理を認識せんと欲するものことに多し。實に理解は實地の知見の眼を開くべき豫備なることを識らず。哀むべし。

歷史的に普遍的啓示なる聖典語錄等及び歷史的に世界に顯はれ行はれたる敎權文字の眞理は光明を照しつゝあり。故に學ぶべし習ふべし則るべし依るべし。然れども要するに之に縛せられざらんことを。

天台大師は閑禪と名字僧とを嫌ひたり。佛敎廣大甚深なり。聖典及び古尊者の示したる龜鑑に依つて自分の啓示を證明しまた益々向上し無邊の佛法海に優遊せんとするには學解なき閑禪者の能はざる處なり。

また佛敎の眞理を知見するは觀心修練の功果として三昧熟し宗敎的實驗によりて佛知見與へらるゝものとす。たゞ敎權文字の中に佛の本質を發見せんが如きは不可なり敎經語錄等すべての解義なるものは其實啓示の材料といはるべし。材料を以ていかに精に研くとも直に心靈を照すの光明と云ふべからず。畫ける太陽に明を求むべからざ

るなり。

證信の手段となるべき解信に依憑と直授の二種あり。前者は聖典及び祖師の語錄等の依るべき處によりて自己の宗敎の眞理を認むべきことを發見し、是れによりて自己の正しき理解によりて確信を立つるもの、空師が導師觀經の疏の一心專念の文によりて彌陀の眞意を解信したる如きなり。後者は傳承的面授にて、師資相傳して宗敎的眞理を傳承す。例へば大乘の菩薩戒を發得するは傳燈師に依りて受戒の時羯磨の一刹那に發得し菩薩戒の本質を解信する如きを云ふ。敎經によりて如來の本質はかう〳〵なりと如實に解信しこれによりて得たる如來の本質を表明せる三昧の內容及び形式を理解し、之を以て如實修行の思惟の材料として如實に修行する時は、廣大甚深なる如來の大海をも如實に知見することを得べし。

また傳承的の直授としては生ける經典なる善知識は已に親ら三昧海中に如實に啓示を得た身にして自己の經驗を以て人に啓示を獲べき所の刺戟を與へるものなり。直授の刺激は大に親躬的啓示の助成となるだけの功あり。しかれども直授の傳承と雖もそは資緣にして全く自己の直接の啓示にはあらず。

佛陀の曰く、我說法は月を指す指の如く、指は正しく月を指して敎ふべくも、指は指にして月にあらず眞實の啓示は指すべくも觀せしむべからず。若し之を强て相傳の名を用うれば以心傳心なり。師の內的證明せる直接の關係によりて資も同じく如來の本質を知見したるのみ。指示によりて正しく自ら月を觀たるものなり。

若し如來の本質眞義を名字に實現し物理的に表現すべきものとせば傳承すべきも例へば火てふ語即ち全く火ならば人火と云ふとき即ち舌を燒かん。こは擬すべく現すべからず、自ら親躬的に啓示されて始めて知る之を證信と名付く。

證信は宗敎的關係の實現を證明し實在本質を信認する正しく知見を與へられたるを證信と名付く。

敎典文字の解釋は天台大師の六卽の中の名字卽にして、いかに經論の文義に精通し

講說を巧みにするも名字卽の分齊にして全く自己の活ける啓示を得たるものと云ふ可からず。これは自己に之と同じき親躬的啓示を得べき豫備とはならん。又敎相の文義によりて啓示の相を信受せざれば躬から啓示を得べき助成機關なきなり。要するに自己親躬的の啓示卽ち冷暖自知の實地に至らんことを。故に傳承の啓示いかに名師によりて傳燈を稟くるも傳燈の名師は眞證の邪正眞僞を證明すべきも、躬親的啓示は自己と客體との宗敎的關係に於て直接に直觀若しくは直覺に感ずべきものにして之を傳ふべきものに非ず。

證信は眞實に躬親の啓示にて自證し得たるものなり。證信こそ佛子一大事因緣にして自から信心獲得し自己の靈性を開發し如來の聖靈が自己の心中に實現するにあらざれば眞の佛子と云ふべからず。

眞實の啓示によりて直接に如來の靈應交涉を得。理性主義の宗敎には見性または悟道又は佛知見開示悟入または悉地三昧發得と名付け、感性宗には恩寵獲得または相好感見または聖靈感得等種々の名を賦するも啓示によりて證信をうるにあり。

釋尊は摩伽陀の伽耶城に遠からざる地に於て臘月八日の曉明星出づる時に無明長夜の眠より廓然として覺醒し無上正眞の道を獲給へり。其證得する所の內容は大乘小乘に於て之を表明する處の相貌異れりと雖も、暫く大乘華嚴の說によれば、如來大悟の晨佛華嚴三昧に入りて自證の分齊を顯現し小乘の聲聞らは佛陀の肉體のみを見て眞の如來の內證の境界に於ては少分も窺ふこと能はず。

形而上なる眞の如來舍那圓滿の法身は無邊の法身の菩薩に圍繞せられて蓮華藏界に安住し、重々無盡の德を以て莊嚴し給ふ。是の如きは佛陀自證の相のみ、他の窺ふべき所にあらず。また盧山の慧遠法師念佛三昧を發得し三度如來の聖貌を拜み淨土の莊嚴を感見す。また天台大師法華三昧を修して靈山一會未散を觀見せるを方便として旋陀羅尼を證得す。また善導大師が般舟道場に入つて淨土の依正二報の莊嚴を感見する等はみな是れ宗敎の眞理を自ら證明す。唐の懷感禪師の如きは始め解義をのみ事とし

淨土の宗義に於て疑惑を懷きたるに竟に善導大師のために啓發せられて念佛三昧を修すること三年竟に白毫を感じ淨土の莊嚴を觀見し而して始めて證信に入る等。又キリストのヨルダンにて聖靈鳩の如くに感ずる等、また伽葉尊者が釋尊の示し給ひし拈華を見て開悟したる如き、其形式は種々にして一定せざるも精神に一點の光明を覺えて其の宗敎的生命に入ることは異ならず。この眞實の啓示卽ち證信によりて智力的結果として無上菩提の嘩曄とはなりぬ。

三聚淨戒

攝律儀戒　一切惡を止む

五戒十戒十無盡戒及八萬四千威儀戒等に至るまで悉く此中に攝す。此戒の德によつて法身を感ず。

攝善法戒　一切善を作す

菩薩四攝六波羅密より乃至一切善事此中に攝す。此戒の德によりて報身を得る。

饒益有情戒　一切衆生を利益す。

有情を攝受する願力を以て生々世々に利益衆生の德を以て應身佛を感ずるなり。

執持名號

如來樣より綱、綱を握る衆生の圖

綱は本願にたとふ
持は綱をとるにたとふ
執は安心、(とるが如し)
持は起行(たぐる如し)
上品(念々相續)中品(時々相續)下品(日々相續)

信機信法

機は我
我見(おれが)。我慢(うぬぼれ)。我愛(みびいき)と貪瞋痴慢疑。
忿(いかり)恨(うらむ)覆(つゝむ)惱(なやむ)誑(たぶらかし)諂(へつらひ)、憍(たかぶり)害(そこなふ)嫉(ねたむ)慳(をしむ)無慚愧、懈怠、放逸、昏沈(うつとり)掉擧(うはき)等なり。
我より起るもの多くは惡なれば我に任すれば苦海を出ること能はず。念々惡なり。闇なり。迷なり。不淨なり。苦なり。

信法
法は佛。南無阿彌陀佛の中には我見もなく、乃至掉擧に至るまですべてなし。善なり。明なり。悟なり。清淨なり。安樂なり。自在なり。是に歸する念は念々みな阿彌陀佛に相應す。念々注意細心。
法によりて、機に任する勿れ。

念佛

眞理の終局に歸趣すれば佛界に入るなり。佛界に歸するは眞理なる故に自然なり。法然なり。故に易往といふ。唯絶對無限光壽卽ち彌陀の聖名を崇め聖意を仰ぎ歸し奉りて、意に至尊をのみ憶念し、口に聖名を稱へ、身に聖意の實現に行動すべし。一念彌陀なれば一念の佛、念々彌陀なれば念々の佛、佛を念ずる外に佛に成る道なし。三世諸佛は念彌陀三昧によりて正覺を成すと「南無」　眞譽佛陀禪那

○

阿彌陀とは絶對無限光壽、十方三世一切諸佛の本體なり。彌陀と釋迦とは本地と垂迹なり。譬へば一月天に在りて影萬水に映るごとく、彌陀を離れたる釋迦あることなく釋迦によらざれば彌陀の實在を實現することなく、釋迦の觀念內容卽ち彌陀なり。法華壽量品の佛壽命無數劫と悲光照無量とは釋迦の本(眞)卽ち阿彌陀無量光壽なることを示したるに外ならず。

一一四

敷島のやまとごゝろとうたはれし朝日ににほふ櫻ばなは西の筑紫がたと東のみやことおなじく優に美しきこの花こそは我日本のひとのこゝろかとおもへば一しほゆかしくぞ感じらるゝ。

よりはなほ此麗はしき花は是大ミオヤが此地上にある子等を慰めんとの聖旨にまします色香とおもへば殊に有りがたく感じられて候。

時しも氣候のかはりゆくけふこの頃御老母御はじめみなさまいかに過したまふや。當地に着して忙なきにまぎれつひに音信を延引いたし候こと御ゆるし下されたく候如來さまの聖影度々に御送附下され御蔭にて西の此筑後の國にて數萬の人々に與ふることをうるに至りしはまことに有りがたく存じ候。

殊に皆樣の如來さまを念じながら捺したることなればまして有りがたく存じ候。

當寺は淨土宗の元祖大師の御弟子なる正宗國師てふ高德の御方が此國にて弘めはじめしより此地を鎮西といふにより淨土宗を鎮西派といふことにて候。

當開山は已に七百年のむかし此地に於て弘め其餘德はいまになほ殘つて非常に善男善女の歸依する寺にて候。昨日にまで一週間の法會は極めて盛大にて候。七百哩隔てし此地に數萬人のためにあなたがたの印刷したる尊影をわかち申すことまことに不可思議の因緣にて候。廿九日御出しの分は今日着し候。いづれもはつきりとおがめましてまことに有りがたく候。延引ながら御禮かた〴〵申上候　頓首

再伸

御老母樣隆子樣また松井樣によろしく願候。阪部樣にはもはや京都より御轉じ被成候ことゝ存じ候御在京ならばよろしく願上候。

元國樣には昨今いかゞわたらせられし哉時分柄御自重是祈り候。

一一五

拜啓稍秋冷に相成候處貴家御隆榮を忻嘉奉り候。小衲は布敎のために馳せまはりよう御うかゞひも得ならず候先頃中は御不快の處此頃にては御よろしきとはるかにうけたまはり候まゝまた此地に布敎のためまいり候。この程は御令母榊原樣態々誓願寺へ御たづね下されてまた御贈りの下されたと誓願寺よりつたへ承り候へども此回は急迫により御訪ね申上ることも出來かね當地（鳥取玄忠寺）へ越し候。十一月（明治二十八年）上旬には小寺の法會なれば是非歸京いたし候。昨今御容體いかゞ、隨分御自重御安快是祈り候

一一六

よろこびてけふもくらさんみひかりのなかにすむ身とおもひけらしに

此頃來はあつき御もてなしにあつかり感謝の言なく候。今晩牛込家政學校にて結緣而して明日は淑德女學校の會に出席候につき今晩また御厄介にあづかり度候。

一一七

眞晝中のあつきにもかゝはらず朝夕のすゞしさ秋かぜのものさびしさも鎌倉山の草木にも見えたりけり。

この頃いかゞあらせられ候や。つひに御無音にうちすぎ候。

願くはみひかりのなかによろこばしき御日ぐらしのほど是いのり候。不日歸京また拜顏可申上候。

一一八

聖きみひかりの裡に生息をうる御互のさいはひを賀し、ミオヤの大いなる御めぐみに感謝し上る。歸京來かねて伺致候處彼是いたし明三日は午前に訪問可仕候。

一一九

拜啓　いまだ不順氣に候處御容體はいかゞと案じ居候。此ほどは御好意をかたじけなうし奉謝候。愚衲事日々所々のけち緣いとまなくこゝろにかけながら御無音候。又御母堂樣にも不順の氣候に候へば昨今いかゞに御座候はんと案じたてまつり候。小衲は今日午後より栃木まで布敎のため出張し候。來る十日頃までには歸京のつもりに候。先は時候のいとひ一に御自愛を乞ふ。

一二〇

よろこびのひかりのほどをしるときはねてもさめてもうれしかりけり

その後は意外之御無音多謝々々。御高堂大なるじひのみひかりのなかに歡喜平和の

風静なる家の庭にいとうるはしき御日ぐらしのほどいづれのよろこびかこれにしかむ

また遠からざる程御訪問申上候。

一二二

ミオヤの大なる御めぐみを謝し候。すべての同胞の幸をいのり候。さて先ごろは御とりこみのなかにて御ねむごろなる御意をわづらはし、かたじけなく謝し上げ候。其後御病氣いかにわたらせられ候や。また御つかれはいかゞや御食事はいかゞや案じ申上候。愚衲このもよりの信者の信根を培養せむが爲に滯在し明日は當家廿二日は誓願寺にてつとめ其後兩日ばかりは矢はりこの近所にてつとめ候。かま倉行は廿七八日まで延引のことにて候。

よろづを大なるミオヤにまかせ候て人事をつくして天命にまかせ候。すべてのことは出來るかぎりつくして其れ已上のことは如來さまに御まかせ申すことが眞理にて候

一二三

つゝしみて啓し進候。春の彌生の頃ほひ承れば貴姉樣には本月中旬頃より御本院に御入院に相成り候とのこと實は先月御別れ申候てより後はこゝろよからぬことはかね〴〵承り侍りしに疾に御快復遊ばされしことゝのみ存じ候ひしにさはなくていまは御入院に相成候ことはいま更におどろきて候。

さてつきましては願くば御からだに就いての事は其係の先生方に御まかせ申候て而して御こゝろの方は天地のみおやなる　如來樣に御一任相成候て偏に稱名を專ら御となへなされ候やう、すべて御心のうちに何一つおもふことなく晴わたる青空のごとくに、而して如來さまは皎々たる月のごとくに感じられ候へば、いかにありがたきことぞ。

たとへからだには病氣は有候へどもこゝろは安らかにたのしく相成候べし。願くば

一日もはやく御本服をねがはしきまゝ御心のやすらかに相成り候ため取敢へず御見舞かた〴〵御一言申上候。

何れ遠からず御面謁の日を期してよろづ申上べく候。御自愛のほど之祈り候。

一二三

欽啓

時下春和の候其後御動靜如何と存居候處承れば御母堂樣には御病氣のため愛知病院に御入院とのこと先頃曾て御いたつきは承り候得共さしたることにてはなく今は御本服のことならんと窃かに存じ候ひしに御入院に成り候とは今更に驚き候。尚愚衲の居所を御尋ねに相成候とのこと、つひにかけちがひて大に延引に相成候。何れ來月初旬には出名候故御訪問申上べく候。願くば御病體御大事に御保養のほど是希候。

一二四

拜復此程はことに嚴しき寒さのなかを御出に相成り尚ましてや前日よりも平島なる地名にまがひ岩倉地方までも御まわりに相成候由まことに御氣の毒に存じ上候。尚又御歸りは晩くなりあの寒きなかを十一時過ぎまして夜中の道中定めて御困難を感じたることにて候ひしならんと察し上げ候。〇〇君には取敢へず承りしことに對する意見などをもて申進じ候。

さて吾愛する處の〇〇子君よ。私はあなたが貞操の變ぜざる御意志に對しては感ずるの外なし。貞松は歳の寒きにとやら、願くは現今煩悶に沈みたまひし御良人のために慰藉したまはんことを。

さて〇〇子君よ。人間てふものは歴史的生活をなすものであると學者は云ふて居る實に生涯の歴史か之が歴史に書いて見たならばまた小説のようなこともあろうし、種

々の實際の小説をあらはしつゝあるので、またこの人界といふ地球の舞臺に出て樣々の活劇を演じつゝあるので、而して役者となりまた見物人となり覽たり見られたりして生涯此役を果さなくてはならぬ天職を有て居るのであります。この活劇に於て殘酷に人をいじめる役者もあれば、またこの酷き憂き目を見る方に廻らざればならぬ役を用て居る俳優もあり。また立派な殿さまとなりて榮華にあまへ傲慢にかまへて人を土芥の如くに見て居る役者もあり、籠かきもあれば車夫馬丁もある。

そこで殿樣になりし役者ぢやとて必ず立派な俳優といふ譯でなし、下僕と成つてあらはれし優者でも千兩役者があらん。○○子君よ、あなたが芝居見物に出て○○の演劇にて殘酷にして無實の罪に伏せる千代子を酷くもいぢめていぢめぬく處の老女の某のあのいかにも憎くにくしい顏を見てあなたは彼に對していかに感じます。また一方に無實の罪に伏して、若し實を明さば老女某までも死は免れまじとおもへば、多くの人をきづつけんことを憂へて、只己れ一人之を耐へだにすればすむべきものをと、己が命までも惜まずかゝる場合に臨んでも天をも尤めず、人をも恨みず、また自ら悔ひずたゞ天に在ますミオヤの慈悲をたのみ之を力として救ひを祈る外に恨みもいかりも胸裡にとゞめざる千代子の衷心に對して同情を表せざるを得ないのでありましやう。

小説をよみても劇場に臨んでも榮耀榮華の夢を見て傲慢に流れて居るひとには何人でも同情はよせぬのでありませう。また艱難にも耐え辛苦にも忍び、いかなることにあたりても天をも恨みず、人をも恨みず還つて之が爲に己が一心のみがけてます〳〵道德の光を放たんとする底の士女に對しては、何人も同情をよせるのでありませう。人々悉く活劇を演じつゝくらして居るではありませぬか。人は一代名は末代の世の諺

人間はたとへ立派な天賦の能を有する人でも榮華に耽る時はつひに平凡の人となりてしまふ。たとへ平凡の人にても艱難困苦によりて種々の鍛錬を經れば超然たる群に拔いたる人となることをう。○○子君よあなたは貴郡にありて最も衆人の爲に目を注るゝ舞臺に登りてあのむづかしき姑のせつかんのもとに最も重役なる役者となりて十

年間の役は隨分衆人の爲に注目せらるゝ。殊に良人出征の留守中の劇場には天晴の女優と云はれしにあらずや。名譽ある女優として世に知られんとせし大切な場合に、天魔はあなたを賢婦として世に稱せられんことを憂へて之を妨げて平凡の婦としていかにもして之を陷さんとせし天魔のワナにあたら賢婦を陷さしめたり。平凡の鐵が千鍛萬錬して正宗の名刀となりぬべし。○○子君よあなたに全く賢婦の光を添ふるものは酷なる砥石なり。あなたを平凡の婦として衆人敢て感ずるものなきに至りなば、あなたが榮華の夢を結ぶときなり。人いかなるものにても氣質のサビなきものなし。之を磨きみがきて光をあたふるものは砥石なり。砥石に觸るゝ艱難なり困苦なり。此艱難困苦こそ賢婦の光を發揮せしむる良材なり。若し人榮華に耽る時は唯表面に娛樂あるが如きなれども精神の奥に一道の如來の光を發見すること能はず外面の艱難に處する時精神の奥に認むべき慈悲の光ほど世に深遠にして且つ尊きものなし。若し人終身この光を認むることなきものは卽ち無明なり。闇に入るものなり。一に吾が愛する處の○○子君よ、あなたの今日の境遇に對して實に同情に耐えざる處、○○子君よあなたが三人の子女を念じなさるよりはまだ深く大なる ミオヤの愛念が其御身の上にかゝりしことを記憶したまへよ。ガンゼなき三人の御子ども衆はあなたの慈愛の我身にかゝることを何ぞ知るべきぞ。然れども愛のふかき母としてなぞ思はざるべきぞお子ども衆はさは存ぜざれども母上の愛はつねにかゝりし如く、こなたは存知せざるも 如來は必ず愛念したまふを、御子ども衆をおもふにつけて、大なるミオヤをな忘れそ。

復た予は○○君の爲に獨立不羈の精神を發さまほし。君にして一たび自ら好んで艱難に入つて精神を鍛錬せば今一層すべての氣質のシブが拔けて本心の光をもて世に處せばいかによかるべきものをとおもふ。

○○君よ。時間は黃金でありますよ。貴重な時間を愚痴をこぼし〳〵して潰してしまはず、この時を幸に少しでもよいから何でも研究しなされよ。決して損は有りま

せぬよ

一二五

蕭しみ啓上候、其後御無音に過し候段多謝候。

承れば御次女○○子孃には御病に丹精の甲斐なく竟に永眠なされ候由。實に無常迅速の世とは申ながら今更の感にうたれ候。實は久しく窺はず皆様御成長後の御面會を樂しみ居りしに、今は再び其面に接することのできぬことに相成りしとは實に遺憾に耐えざりき。

遙かに隔ちし身ながらも哀悼に耐えざりし。ましてや血を分けし恩愛の悲歎のほど同情に勝え申さず候、

就いては御すゝめ申候事は親の情として子をおもふ恩愛の情ほど深き情はなかるべし亡き○○子孃をおもふごとくに

阿彌陀如來なる大悲の親様があなた方を可愛くおもひ給ふこと、あなた方が○○子様をおもふごとくに可愛くおぼしめしています。子を持つて親の情を知る。願くば阿彌陀如來が我等衆生の子らを慈悲のみ手を離れて闇黑のなかに落ちなば、いかに大悲の親様はなげかせたまふらんと、ひし〳〵と大悲のみ手にしかとすがりて如來さまと離れぬやうに稱名を唱へて心に大悲の親様を頼み奉るやうになされたまふやうに、御すゝめ申し進じ候。○○子孃の追善の手向としてもあなた方が自分で眞實に如來大悲の光明を仰ぎてこの光明のなかに先だちし孃の亡靈は冥土の闇より如來の光明の中に永遠の救を得るやうに一心に念佛して祈り給へよ。

傳へ聞く。彼の和泉式部は古今の女文豪なれども一りの女小式部内侍に先立たれ悲みに耐えず、

諸共に苦の下には朽ちずしてひとり憂き目を見るぞ悲しき

とよまれしも性空上人の御みちびきに依りて阿彌陀如來の大悲の親様をたよるやうに

なりて段々に光明に靈化せられてのちには深く如來の大悲をしらるゝやうになりて眞底から難有くなりて、

夢の世にあだにはかなき身をしれと教へてかへる子はほとけなり

とよまれしとかや。

和泉式部も前より佛教を知らざるにはあらざりしも心からしみ〴〵御慈悲を感ずるやうになりしは小式部内侍に先き立たれて偏に彌陀の大悲を仰ぎて一心に念佛して心の底から彌陀の慈悲を得て魂が生れ更りて始めて難有くなりしなり。

○○子孃はあなた方を永遠の光明に誘引せんが爲に如來の使なることを信じて正しくあなた方の深き信仰を得る時に孃は如來の使なりと云ふことを證することを得んと○○子孃をおもひ出す毎に

大悲の親さまをおもふて念佛したまへ。是亡き孃の眞實の手向にて候。

一二六

ことしの秋もはや半は過ゆきしぐれ〴〵に色づくこずゑの紅葉なににたとふべき。御めぐみにしみ〴〵とそみにし聖子たちにまで白す。

御院主さま御始め御院内みなさま、ます〳〵御精進のほどこよなき御目出度とこゝろほぎ奉り候。時にこの頃本隨さまことかねての御不快いかゞにあらせられ候や意に懸りながらいつしか御尋ね申すことをこたり慚謝々々。一大事を荷へる御大切の御身にしあればかへす〴〵も御自重是祈り候。

あれこれ申上度事多く候へどもまたの日を期して申上候御一統の衆へよろしく御傳聲願上候。

一二七

時しも秋の末つかた野山の梢も紅に黄に色濃やかに染りける折、其のち云何御くらしなされ候哉、先つ頃法藏寺にて初めて御面會いたし時間も乏しくて　如來の御慈悲の事も細かにのぶることも出來ぬやうなことにて候。

故亡夫君には因緣深くして末賴敷く存じ居り候處つひに現在にては會ふこともできぬことになりゆきしことは遺憾に存じ候。しかれども故夫の君には平素　如來の御本願を信じ居りしことなれば　如來の大悲必らず救ひたまひしことゝ信じ候。老少不定は世の習ひ會者定離は娑婆の掟なればこれいたし方なきことに候へば、あなたに御すゝめ申候事は、すべて彌陀如來てふ大悲のおやさまを賴みとし、いかなる場合にも如來が大なる力を以てあなたを守りたまふことを信じて、なき夫の君のわすれがたみの子ども衆の養育にもやはり如來の大悲の光明をたのみとし光明の中に精神的に御敎養の程最も肝要にて候。

如來さまには法身報身應身の三身になりて我ら一切衆生なる子を養ひたまふ。法身としては天地萬物日月星辰等はすべてあなたのみちからによらざるものはない。我ら一切衆生は法身から分れ出でたる佛性といふ卵子にて候。佛性の卵子をあたゝめて信心開發して下さるのは報身如來にて候。報身如來は宇宙間最上位に在して智慧と慈悲との光明普ねく十方世界を照して念佛の衆生をその光明の中にをさめておすくひ下さる。慈悲の光明にあたゝめらるゝから、卵子から雛子が孵化するやうに、我等衆生の信心開發するときは、喩へば卵子から雛子が出たやうなものにて候。

別紙地に認めたるものは、大悲のおやさまがつねに私ども一切衆生を夜となく晝となく間斷なく御守り下さる御すがたを拜寫したるものにて候。

是を平生に御じひのみすがたを心にうかべて念佛するときは、つひには如來さまが目前に彷彿として在すごとくに感じられてかたじけなく思はれ候。

源信僧都は、ぬれば夢さめればうつゝつかの間も忘れがたきは彌陀のおもかげと御よみなされ、

善導大師は、如來は眞金色にして何ともうるはしい御すがたがつねに見たまふと仰せられた。

信仰の第一義はつねに如來を憶念といふて、いつでもこゝろに慈悲のおやさまをわすれずこゝろにおもふて居る所にふかいおやこの因緣となることにて候。

故にこの御すがたをじひのおやさまとおもふて念じなされたまへよ。

いつかまた御面會のうへに如來のおじひをよく御はなし申すことがありましやう。

信仰のことは死して後ではありませぬ。現在から如來の光明中にひぐらしをする所にあり。現在から如來とおやこのしたしみ合ふ處にあり候。

昭和七年十一月十三日　印刷
昭和十年十一月十五日　發行
東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六六八五一番
編輯兼發行人　山崎辨成
小石川區關口町六十五番地
印刷人　小林七太郎
小石川區關口町六十五番地
印刷所　靜文社印刷所
電話牛込五四一九番
賣代郵稅共　年二圓